

北見工業大学における習熟度別授業—英語講読 IA・IB への導入の成果と課題—

三枝 和彦

Abstract

More and more institutions of higher education in Japan have recently used a system of ability grouping in foreign language teaching in order to provide students who have different levels of knowledge and skills with effective instruction. Kitami Institute of Technology also started to use this system in their English education program in 2009 for similar reasons. This paper will evaluate the state of ability grouping at the institute and will aim to improve English teaching as well as give information about ability grouping to other faculties. Firstly, the paper surveys the reason why ability grouping was introduced and how it has been implemented thus far. Then, the paper analyses the results of a questionnaire given to students on their views of ability grouping. Participating teachers' views will also be presented.

I はじめに

平成 25 年 9 月 4 日に北見工業大学で「習熟度別授業の事例報告」と題した FD 講演会が開催された。この催しは、平成 21 年度に本学の英語教育に導入された習熟度別授業の現状を分析し、その成果と課題を把握すること、他の科目への習熟度別授業導入の判断材料を提供することを目的として企画、実行された。本稿は、そこでの筆者の発表「北見工業大学における習熟度別授業(英語講読)の現状と課題」に加筆修正を施したものであり、発表を論文として残すことで本学における英語教育の一助となることを企図している¹。

北見工業大学の現行カリキュラムにおける英語科目には、学部一、二年次の必修・共通教育科目として開講されている、英語講読(IA・IB・II)、教養英語(I・II)、口語英語(I・II)がある。このうち習熟度別授業が実施されているのは、英語講読 IA・IB である。この科目は一年生対象、一コマ 90 分、週一回で、共通講座の日本人教員 5 人が担当している。以下、この科目につい

¹ 講演会は君島利治先生(東京農業大学オホーツクキャンパス)のご発表と、筆者の発表から構成された。

て、まず習熟度別授業導入の経緯を簡潔に説明し、続いてこの方式の概要を紹介する。それから習熟度別授業に関する学生アンケートの結果を分析し、運用の現状について考察していく。

II 習熟度別授業導入の経緯

英語講読 IA・IB への習熟度別授業の導入には、平成 20 年度から始まった系列別入試が深く関わっている。それまでは 6 学科がそれぞれ新入生を募集していたが²、2 学科ずつの 3 系列にまとめる改組を行い³、系列ごとに募集枠を設けることになった。学生は二年進級時に系列内のどちらかの学科を選択する。英語力の養成をカリキュラム・ポリシーに掲げる本学では⁴、英語もコア科目として設定され、その成績が二年進級時の学科決定の判定材料に含まれることになった。そのため、複数の教員が担当する英語講読 IA・IB の授業では、成績の公平性に配慮する必要性が生じた。

系列別入試が開始した初年度から、成績の公平性に対する配慮を意識した授業が実施されたが、この年度はまだ習熟度別授業は導入されていなかった。一年生は各系列を ABCD の 4 クラス(例えば機械・社会 A、B、C、D)に分け、それぞれ別々に授業が行われた。各系列は基本的に 2 人の教員が担当した(例えば機械・社会 A、B は教員 A が、機械・社会 C、D は教員 B が担当)。クラス間の公平性に対する配慮として、系列内では教科書、進度、試験範囲を統一した。ただし、試験問題自体は教員の裁量に任された。

初年度はこのように授業が行われたが、これでは英語の成績に関してクラス間の公平性が保てないという声が学科の教員から上がり、その対策を英語教員間で協議した結果、翌年度つまり平成 21 年度から統一試験と習熟度別クラス編成を導入することが決定された。導入に当たっては、既に習熟度別授業を実践していた近隣の大学、東京農業大学オホーツクキャンパスの方法を参考にして、習熟度別クラス編成・授業の仕組みを整えた。

このように、本学の習熟度別授業は系列別入試の開始に伴い導入されているが、学生間の

² 機械システム工学科、電気電子工学科、情報システム工学科、科学システム工学科、機能材料工学科、土木開発工学科

³ 機械・社会環境系(機械工学科・社会環境工学科) 情報電気エレクトロニクス系(電気電子工学科・情報システム工学科) バイオ環境・マテリアル系(バイオ環境化学科・マテリアル工学科)

⁴ 工学部のカリキュラム・ポリシーに、「国際社会に適応可能な『語学教育』」が掲げられている。

英語力の差の拡大への対処でもある。学力低下がつとに叫ばれているが、授業を行う上でより大きな問題となっているのは、学生が多様化して学力格差が広がっていることである。推薦入試枠の拡大などもあり、本学でもそれがいっそう顕著になってきている。学力差のある学生を同じクラスに収める従来のクラス編成では授業運営が難しくなり、教育の質を維持するには習熟度別クラス編成が必要だと考えられたのだ。更に、授業のレベルに対する学生の不満もあった。平成 20 年度の時点で全国の国公立大学の 65% で英語の習熟度別授業が実施されており、本学もその流れに乗った形と言える⁵。このように、本学での習熟度別授業の導入は、成績の公平性に対する配慮と、拡大する英語力の差への対処として決定されたのである。

Ⅲ 習熟度別クラス編成(英語講読 IA・IB)の概要

i. プレースメントテスト

学生を習熟度別に振り分ける手段として、プレースメントテストを行っている。その概要は次の通りである。なお、問題作成及び採点処理からクラス編成まで、英語担当の教員が行なっている。

- ・マークシート式・30 問・30 点・50 分
- ・問題は文法と文章読解から構成され、リスニングは含まない。
- ・難易度は英検二級程度で、平均点が六～七割程度になるように作成されている(図 1)。

図 1 プレースメントテスト過去 3 年間の平均点

平成25年度	平成24年度	平成23年度
16.94点	19.02点	18.35点

クラス編成までの流れを図 2 に示した。25 年度はプレースメントテスト翌日が英語講読 IA の初回授業であったため、特に時間的余裕がなかったが、例年これと同様のスケジュールである。この日程は学生にも教員にも負担となっはいるが、幸いにも今のところ問題は起きていない。

⁵ 国公立大学 747 大学中 487 大学 (65%) で能力別クラス編成が実施されている。(広島大学高等教育研究開発センター『大学における教育内容・方法等の大学教育改革に関する調査分析』事業成果報告書、32 頁。)

図 2 クラス編成のスケジュール—平成 25 年度を例に—

4月5日(金)	入学式、新入生ガイダンス
4月8日(月)	プレースメントテスト、系列別ガイダンス 試験終了後、即座に採点処理、クラス編成、掲示(教員が担当)。学生支援課へデータを渡す。
4月9日(火)	前期授業開始(英語講読IA初日) 学生は掲示でクラスを確認し、該当する教室へ向かう。

ii. クラス編成・規模

プレースメントテストの成績に従い、新入生を上級・中級(上・中・下)・初級の5段階に分ける。一クラスの規模はおおよそ40名強から50名弱である(図3)。各レベルを教員1人が担当する。担当クラスは年度ごとのローテーション制をとっている。現行の時間割では、授業は火曜日の午前が開講されており、どのレベルのクラスもAクラス(8:50~10:20)とBクラス(10:30~12:00)に分かれている。この区分は便宜的なもので、両者にレベルの差はない。また、クラスを編成する上で、次の点に留意している。

- ① 上級と初級の学生数をできるだけ少なくする。
- ② 上級と中級、初級と中級の境界は厳密にする。
- ③ 中級は各クラスの学生数をほぼ均等にする。

①について、上級と初級は一クラス30数名程度の比較的少人数に抑えることが、学習効果を上げるためには理想的であるが、学生数やプレースメントテストの成績との兼ね合いから、現実的にはそうならないことが多い。③について、結果的に隣接するクラスに同点の学生が配属されている。本来は得点圏ごとにクラス分けすべきだが、クラス規模を適正に保つためにこのような措置を取っている。なお、中級の隣接クラスでは英語力に大きな差は認められないため、この編成方法に大きな問題はないと考えられる。この点について学生からの不満は確認されていない。

図 3 平成 25 年度のクラス編成状況

	クラス規模	各クラスの得点域(30点満点中)	各クラスの学生数(435名中)
上級	30名強	27~23点(90.0%~76.7%)	68名(15.6%)
中級	50名弱~40名強	22~13点(73.3%~43.3%)	276名(63.2%)
初級	40名強	12~5点(40.0%~16.7%)	91名(20.9%)

*** 上級と初級は 2/1 を、中級は 1/6 を掛けた数が一クラスのおおよその人数である。**

また、クラスを下げて欲しいなど、クラス編成に関する学生からの申し立てには原則として応じて

いない。再履修者については、英語講読 IA(前期)の再履修者はプレースメントテストを受験し、英語講読 IB(後期)の場合は、学生が担当教員と相談の上で決めるが、通例は過年度と同じか下のレベルが勧められる。

iii. 授業の運営

教授法や教材は各教員の裁量に任されているが、共通の副教材として基礎的な文法ドリルを使用し、授業内容に一部共通性を持たせている。

iv. 評価方法

英語講読 IA・IB の評点内訳を図 4 に示す。

図 4 成績評価の割合

英語講読IA(前期)	
プレースメントテスト 30%(30点)	クラスでの成績 70%(70点)

英語講読IB(後期)	
クラスでの成績 70%(70点)	達成度テスト 30%(30点)

英語講読 IA・IB どちらにおいても、クラスでの成績の評価方法は担当教員の裁量である。英語講読 IB の評価項目である達成度テストは学年末に実施される統一試験で、プレースメントテストと対になり、一年間の学習成果を測る試験として位置づけられている。試験方法、問題構成、難易度などはプレースメントテストに準じており、達成度テストの問題も英語担当教員が作成している。なお、10 点分(10 問分)は、先述した共通の副教材から出題されており、こうすることで部分的に指導内容と試験範囲の統一化が図られている。

このように、英語講読 IA・IB の評点はクラスと統一試験の成績の総合から与えられている。これは、評点に占める両者の比率は異なるものの、他の大学でも実施されている方式である⁶。これは、担当教員の異なるクラス間での評価を平準化し、公平性を図るには有効な方策だと考えられる。また、統一試験では英語力の差が明確に得点に反映されるため、上級クラスの学生は

⁶ 杉森の調査によれば、2002 年時点で統一テストを成績評価の一部にしている四年制大学は、194 大学中 14.8%である。

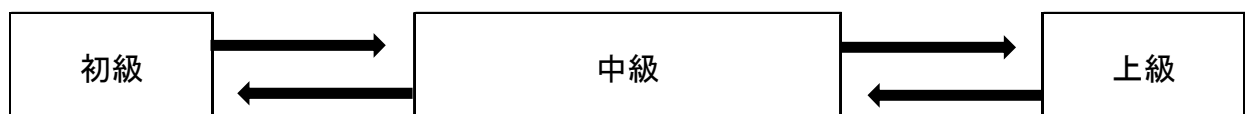
高い点数を得られる一方、初級クラスの学生はほとんど得点できない。習熟度別授業では、担当教員の異なるクラス間、レベルの異なるクラス間で評価バランスを取るのが難しい場合が少なくないが、この統一試験が事実上の調節弁として機能している。更に、プレースメントテストの成績を評点に組み込むことで、下位クラスへの配属を狙って学生がテストで手抜きすることを防止できる。

ただしこの方式には、学生や教員への負担が増すというデメリットも存在する。まず、前期の講読 IA の場合は、初級クラスであれば授業開始前に 20 点以上のビハインドを負うことになり、学生が授業への意欲や積極性を失うことが懸念される。教員はこの点に配慮しなくてはならない。また、後期の講読 IB についても、統一試験の失点を見越してクラスでの成績を出さなくてはならないため、クラスによっては期末試験で不合格者が出ないようにするために、担当教員は試験の難易度に特に注意を払う必要があったり、小テストを頻繁に実施するなどして、積極的に得点を与えていく必要があったりする。したがって、下位クラス、特に初級クラスの担当教員の負担は比較的重いと言えよう。

v. クラス移動

前期終了時にクラス移動(クラス替え)の制度を設けている(図5)。成績優秀者(クラス配点分の 90%以上得点)は上位クラスに移動する権利を得る。権利を得るのであって、必ずしもクラスを移動する必要はなく、判断は学生に委ねられている。一方、成績不振者(総合評点が 60 点に満たない、つまり合格点に達しない)は下位クラスへの移動を指導される。

図 5 クラス移動



この制度には主に二つの意義がある。それは、クラス移動の可能性があることによって、学生のやる気ないしは危機感を刺激することができることと、実力に相応しくないレベルのクラスに配属されている学生を、より適正なクラスへ再配属することである。この制度によってプレースメントテストでの振り分けが補完されており、試験結果が思いがけず良かった、ないしは良くなかった学生が、更に半年間、自分の実力に合わないクラスを受講するという不利益を排除することができる。

以上が、本学における英語講読 IA・IB の習熟度別授業導入の経緯と制度概要である。続い

て、これを運用する中で見えてきた習熟度別授業のメリット、デメリットを見ていきたい。

IV 英語講読 IA・IB における習熟度別授業の成果と課題

i. 習熟度別授業のメリットとデメリット

本節では教職員の所見と学生アンケートをもとに、本学の習熟度別授業の実態を把握していくが、それに先だって習熟度別授業のメリットとデメリットを確認し、本学のデータを分析する際の助けとしたい。メリットとデメリットのいくつかは容易に想像できるだろうが、高橋は次のようにまとめている。

【メリット】

- ①学習者の学力に応じた授業ができ、学力向上に効果がある。
- ②上位クラスの学習者はお互いに磨き合い、学習意欲を高める。
- ③下位クラスの学習者は優れた学習者による圧迫感がなく、楽しんで学習できる。
- ④教師は教えやすい[。]
- ⑤下位クラスの学習者に特別の手当ができる。
- ⑥上位クラスの学習者の学習を遅らせないで済む。
- ⑦落伍者がほとんどいなくなる。
- ⑧成績向上者と不振者との入れ替えが良い刺激となる。

【デメリット】

- ①学習者に差別・選別意識が生まれる。
- ②下位クラスの学習者が劣等感を抱く。
- ③上位クラスの学習者が優越感を抱く。
- ④下位クラスを担当する教師の負担は過重となる場合が多い。
- ⑤成績向上者と不振者との入れ替えを行う場合、進度、教科書の違いに問題が生じる。
- ⑥学習成績評価がむずかしくなる。
- ⑦同時開講のため、時間割編成上、無理が生じる。
- ⑧学習者の保護者に虚栄心から感情的な反対を示す場合がある。[ママ] (147-48 頁)

短所の⑧は大学での習熟度別授業にはあまり当てはまらないように思われるが、その他の点はどれも肯けるものである。これらを踏まえた上で、本学の実態を分析していく。

ii. 担当教員からの声

英語講読 IA・IB を担当する教員から、習熟度別授業に対する所感を寄せてもらった。なお、これらの教員は習熟度別ではない英語の授業も担当しており、両者の違いを実感できる立場にある。

<メリット>

- ・授業の難易度や進度を設定しやすい。
- ・教材の選択が容易である。
- ・クラス内での成績評価が容易である(試験問題を作りやすい)。

<デメリット、改善点>

- ・初級クラスを担当する教員の負担が高まる傾向にある(単位取得に必要な点数を取らせる、学習意欲を高める、欠席させない、ために工夫を要する)。
- ・学科横断的なクラスであるため、特定の学科を対象にするような教材、話題を扱うことは難しい。
- ・クラス間の流動性が増すと、学生に刺激となるので良い。

教員から寄せられた意見は、高橋が掲げたメリット、デメリットに重なっている。成績評価は、クラス間のバランスを考慮すると難しくなるが、クラス内に限って言えばむしろ容易になる。また、評点の一部に統一テストの得点が加味されるので、完全な統一テストほどではないにしろ成績評価の公平性は担保されるはずである。一方デメリットについては、下位クラスを担当する教員の負担は実際に他のクラスよりも重いと言える。前節の評価方法でも触れているが、プレースメントテストによるビハインドがあること、期末試験一度での評価は得点が不足する可能性が高いことなどから、中間試験に加えて普段から小テストなどをこまめに実施して積極的に評点を与えると同時に、英語に対する学生の意欲を引き出すように努める必要がある。クラス間の学生の入替えは、それほど多くはなく、あったとしても全体で数人程度である。クラスが上がるにしろ下がるにしろ、その可能性が増せば学生に刺激が与えられて日々の学習に対する姿勢にも変化が起きるかもしれない。しかしながら、実際には、高橋が挙げた短所⑤にあるように、学生の入替えを行うと、新たに教科書を買直したり、名簿上の処理が発生したり、学生が新しい教師とクラスになじむ時間と労力がかかったりすることなどから、流動化を期待するのは難しいかもしれない。

iii. 学生の声

英語講読 IA・IB の習熟度別授業について、学生自身はどのように感じているかを調査するためにアンケートを実施した。これは平成 25 年度前期末に、学部一、二年生を対象として RENANDI のアンケート機能を利用して行った⁷。質問数はそれぞれ 8 問で、主な調査項目は、①プレースメントテストは適切か、②習熟度別授業により、実力に合った授業を受けられているか、③習熟度別授業が授業の理解に貢献しているか、④学生は習熟度別授業に肯定的か、である⁸。習熟度別授業ではない英語講読 II を今年度受講している二年生も調査対象にした理由は、習熟度別であるのとそうではない英語講読を体験した学生の声聞くことによって、習熟度別授業に対する学生の反応がより明確になると考えられたからである。以下では、一年生、二年生という順でアンケート結果を分析していく。

<一年生対象>

一年生対象のアンケートでは、対象者 423 人のうち 360 人から回答を得られ、回答率は 85.1% だった。図 6、7 に示したように、質問(1)、(2)はプレースメントテストに関する質問である。まず質問(1)について、試験が「難しかった」(10.6%)、「少し難しかった」(23.3%)を合わせて、問題を難しく感じる学生が三割以上いたことが分かる。これは本学の英語教員にとっては予想できる結果だろう。恐らく文章読解問題についてはほとんど読むことができずに解答している学生も少なくないと推測される。しかし、「少し難しかった」、「適切だった」(56.1%)、「少し易しかった」(4.4%)を合わせると 83.8% であるから、学生たちは適当な難易度の試験だと感じていると言えるだろう。

⁷ RENANDI とは日本ユニシス株式会社が開発した授業管理システム(Learning Management System)で、履修科目の予習・復習の他、授業関連情報のやりとりをインターネット上で行うことができる。

⁸ 質問項目は英語担当教員の意見を取り入れつつ、主として筆者が作成した。

図 6 質問(1)プレースメントテストの難易度は、あなたにとって適切でしたか。

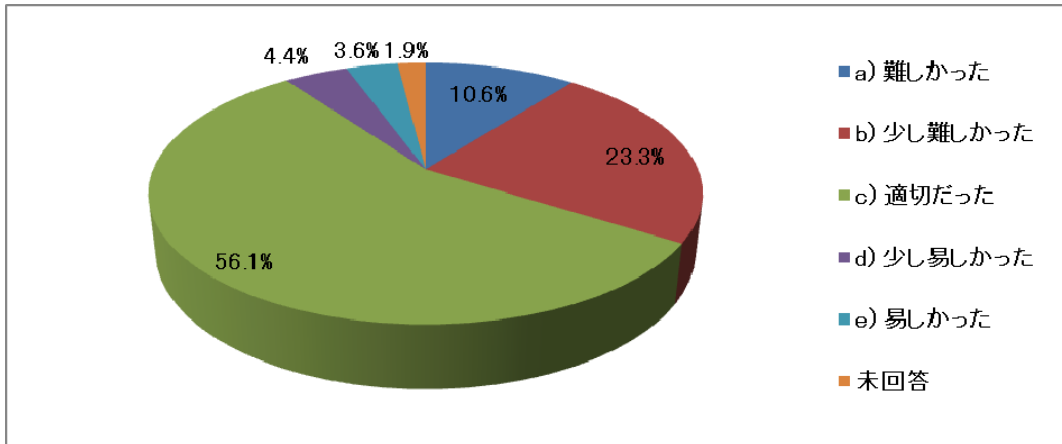
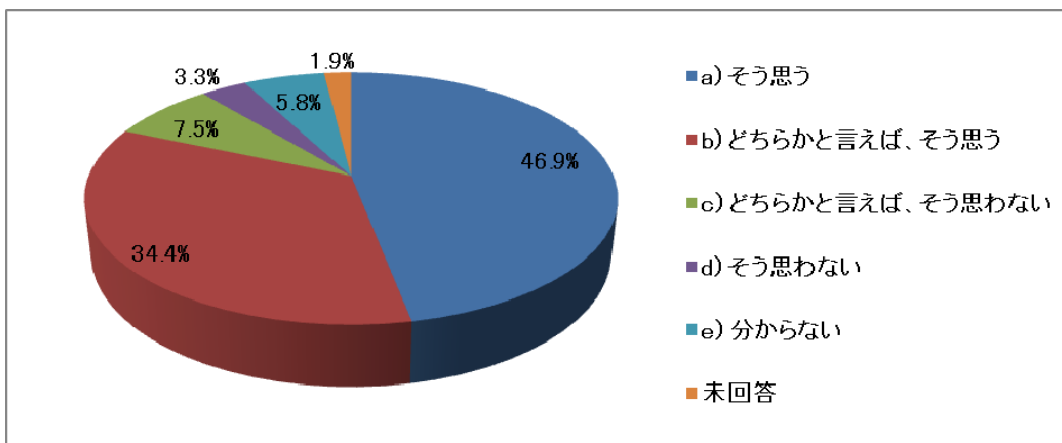


図 7 質問(2)プレースメントテストの結果、あなたは自分の英語の力に見合ったクラスに振り分けられたと思いますか



また、質問(2)は振り分けられたクラスに学生自身が納得したかどうかを尋ねているが、「そう思う」(46.9%)、「どちらかと言えば、そう思う」(34.4%)を合わせて 81.3%の学生がクラス分けに納得している。マークシート方式の一度の試験で振り分けるため、調子が出ないために得点が伸びなかった、あるいは偶然良い点を取ってしまった学生もいるだろうから、自分が認識する実力に見合わないクラスに振り分けられてしまう学生がどうしても出てしまう。ただし、担当教員はそれぞれのクラスはほぼ実力ごとに分けられていると感じているようだ。特に上級クラスと初級クラスとの他クラスとの差異はかなり明瞭である。学生の八割が納得していることも考慮すれば、現行のプレースメントはその役割を十分果たしていると言えるだろう。

これ以降は英語講読 IA の授業に関する質問である。図 8 によれば、67.2%の学生は授業の難易度が「適切であった」と感じている。それに隣接する「少し難しかった」(10.3%)、「少し易し

かった」(13.1%)と合わせれば、90.6%、326 人の学生はそれほど無理も退屈もせずに授業を受けることができたと言えるだろう。つまり、授業が目標とする学力と、実際の受講者が持つ学力との間に極端な差はない。

図 8 質問(3)英語講読 IA の授業の難易度は、あなたにとって適切でしたか。

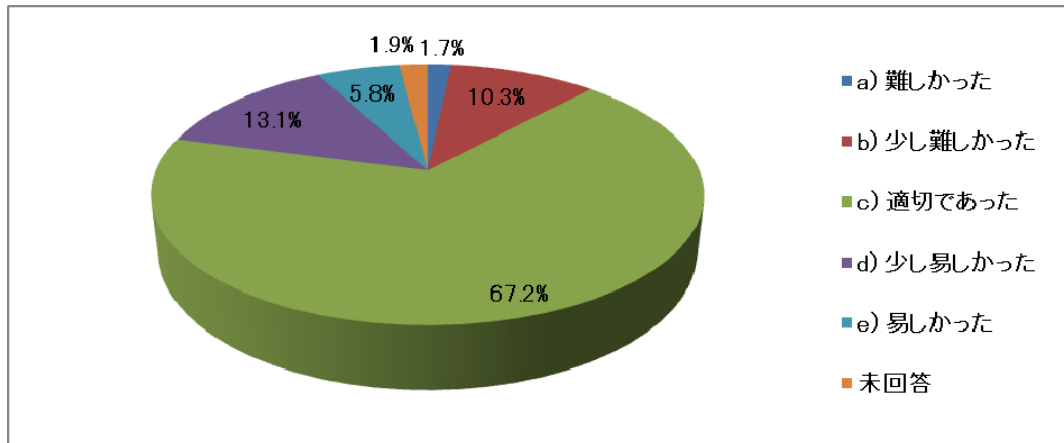


図 9 質問(4)英語講読 IA の授業は良く理解できましたか。

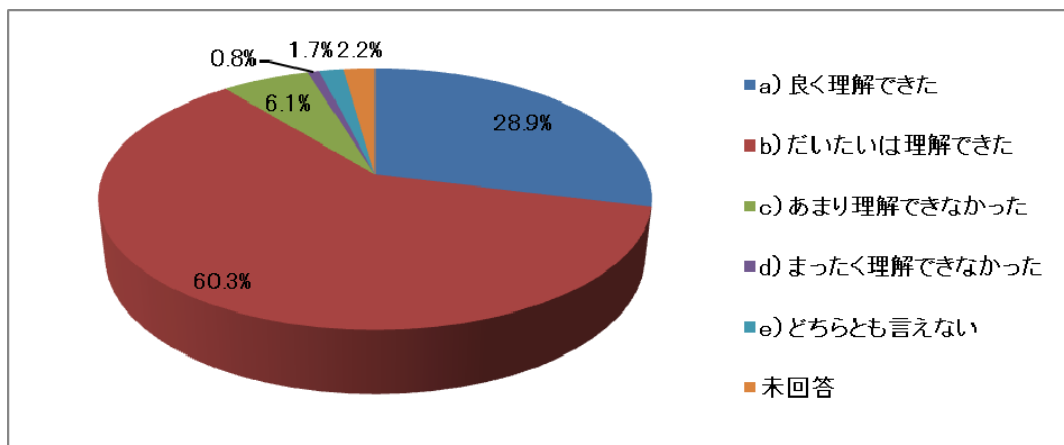


図 9 では、授業を「良く理解できた」(28.9%)と「だいたい理解できた」(60.3%)を合わせて、89.2%、321 人の学生が授業を理解できたと答えている。したがって、学生の実力に対応しい授業を展開し、十分に理解してもらうという、習熟度別授業のもっとも重要な目的は達成されていると言えよう。

習熟度別クラス編成には、高橋の掲げるメリットにもあったように、クラス内の学生の実力を均一化することによって、学生が自分の実力に引け目を感じることなく、積極的に授業に取り組めるようにすることも期待されている。図 10 に示された質問(5)はこの点を問う質問であるが、それによると、習熟度別にクラス分けされていることによって授業に取り組みやすかったと答えた学

生は、「取り組みやすかった」(40.0%)、「どちらかと言えば、取り組みやすかった」(35.6%)を合わせて 75.6%に上り、この期待もおおむねかなえられていると言える。

図 10 質問(5)英語講読 IA が習熟度別にクラス分けされていることによって、あなたは授業に取り組みやすかったと思いますか。

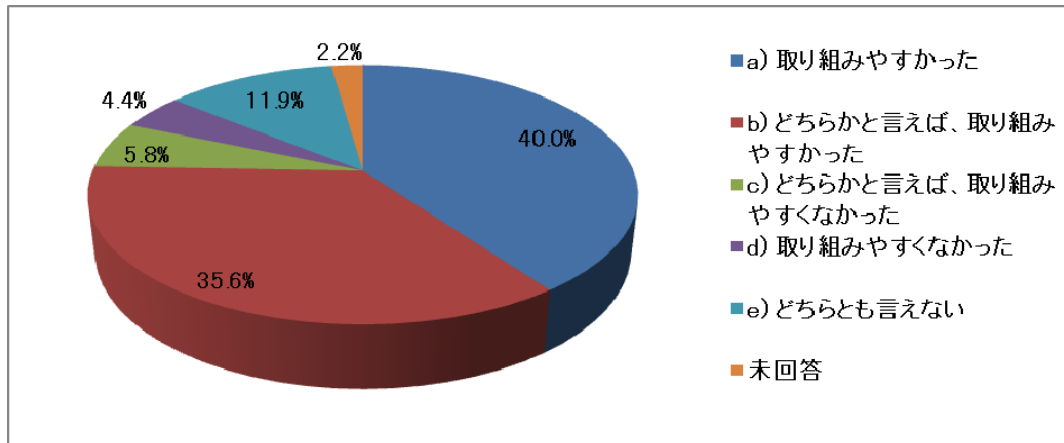
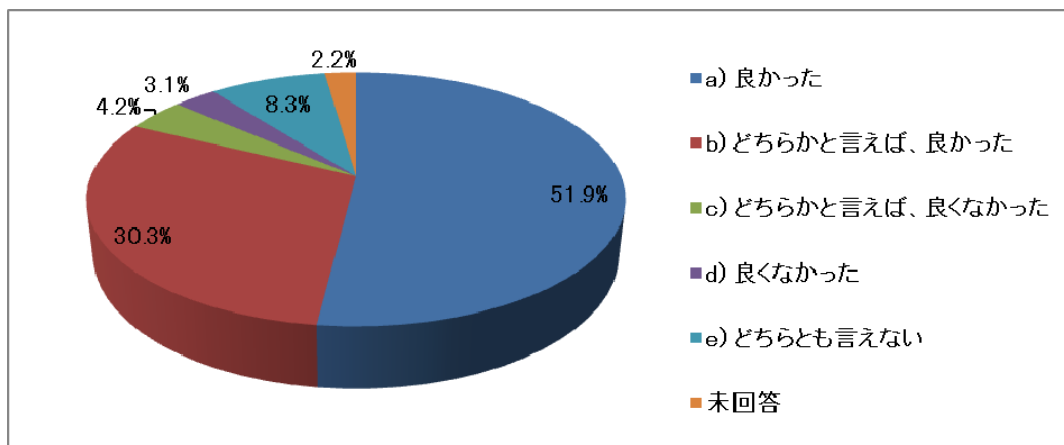


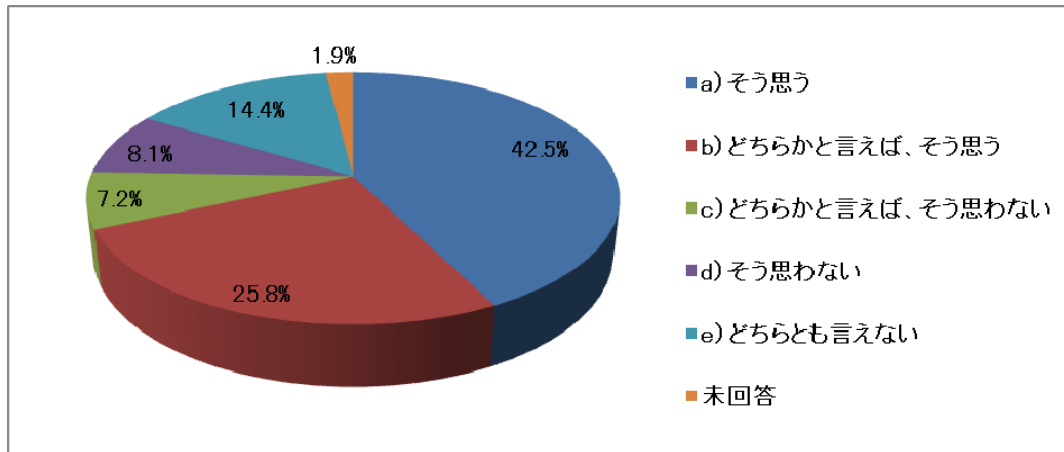
図 11 質問(6)英語講読 IA が習熟度別授業であることを、良かったと思いますか。



そして、図 11 によると、51.9%の学生は英語講読 IA が習熟度別授業であることを「良かった」と感じており、「どちらかと言えば、良かった」(30.3%)と合わせて 82.2%がこの方式を肯定的に受け止めていると分かる。興味深いのは、図 12 に示された質問(7)の結果である。現在、二年生が受講する英語講読 II では習熟度別授業は実施されていないが、英語講読 IA を受講した学生が、英語講読 II でも習熟度別授業を望むかどうかでここで問われている。結果は、「そう思う」(42.5%)、「どちらかと言えば、そう思う」(25.8%)を合わせて、英語講読 II も習熟度別授業であって欲しいと思う学生は 68.3%に留まっている。質問(6)で見たように、八割以上が習熟度別授業に対して肯定的であったわけだから、それを考慮すればこの結果は若干少ないように思わ

れる。

図 12 質問(7)第二学年で受講する英語講読Ⅱは習熟度別授業ではありません(様々な学力の学生が同じクラスに存在します)が、もしできれば、英語講読Ⅱでも習熟度別クラスで授業を受けたいと思いますか。



習熟度別授業に対する考えを自由に記述させた結果を図 13 に示す。残念ながら回答数はそれほど多くなかったが、回答の中では習熟度別授業に対する肯定的な意見が多く認められた。なお、回答は質問の趣旨に沿ったものを拾い上げ、原文の趣旨を損なわないように適宜修正したものを記載した。カッコ内の数字は同趣旨の回答数である。

図 13 質問(8)習熟度別授業について、意見があれば自由に書いて下さい。

<肯定的意見>

自分のレベルに合った授業なので良かった。分かりやすかった。(8)

同レベルの学生同士なので授業に取り組み易い。積極的に参加できる。劣等感を味わうことがない。(2)
習熟度別だとやる気が出る。(2)

習熟度別になると、苦手な学生も取り組み易くなるので良いと思う。

習熟度別授業の方が実力が付きやすい。

英語講読Ⅱも習熟度別授業を実施して欲しい。(7)

高校でも習熟度別授業を受けてきたので、大学でももっと増やして欲しい。

他の系列やクラスの学生と交流を持てるので良い。

＜否定的・中立的意見＞

教師(クラス)によってテストの難易度が異なることに納得できない。

上級クラスだけ難しい。

クラスによって学習内容に上限があるように感じた。制限をかけないで欲しい。

プレースメントテスト一回の結果で、一年間のクラスを決めて欲しくない。

授業は下のレベルに合わせて行って欲しい。

もっと下のクラスが良かった。

どちらとも言えない。

肯定的な意見としては、自分のレベルに合った授業が展開されたので分かりやすかった、周りが自分と同じレベルなので劣等感を味わうことなく積極的に授業に参加できた、などがあり、習熟度別授業に期待されるメリットを実感している学生がいることが分かる。英語講読Ⅱでも習熟度別授業を望む声も少なくない。また、習熟度別授業が系列横断的なので、他の授業などでは接触することの少ない、他系列の学生と知り合うことができることを長所として上げる学生もいる。週一回の授業で、このことを実感できる学生はそう多くないとは思われるが、習熟度別授業は学科・系列の垣根を越えた学生の交流を促進する側面もあるようである。

その一方で否定的な意見も散見された。習熟度別授業ゆえに教授内容に上限が設けられているように感じたという回答は、習熟度別授業が伴わざるをえないデメリットのひとつを指摘している。他の回答には、本学の習熟度別授業の仕組みを理解していないような意見も見受けられるので、統一テストの得点が成績評価に含まれる意義や、前期終了時でのクラス移動の制度などに対する学生の理解を更に深めるべきだと考えられる。そうは言うものの、高橋の短所に掲げられていたような、習熟度別クラス編成が劣等感や優越感を生む、といった意見は寄せられていない。学生自身はこの点をそれほど気にしていないのかもしれない。以上の結果からは、習熟度別授業は学生にも肯定的に受け入れられていると言える。

＜二年生対象＞

続いて、二年生対象のアンケート結果を見てみよう。対象者 430 人のうち 304 人から回答を得られ、回答率は 70.7% だった⁹。質問(1)～(4)は昨年度受講した英語講読ⅠA・ⅠB について、質問(5)～(7)は前期に受講した英語講読Ⅱ についてである。質問(8)は一年生の場合と同様

⁹ ただし、各回答で一割弱の未回答が認められるため、実質は六割程度の回答率である。未回答は、故意にあるいは故意ではなく、該当の質問に答えずに回答を終えてしまった者である。

に自由記述式で、習熟度別授業に対する意見を書いてもらった。ここでも質問の趣旨に沿った回答を拾い上げ、原文の意味を損なわないように適宜修正したものを掲載した。なお、回答の中には英語講読 IA・IB のことを言っているのか、英語講読 II のことを言っているのか分かりにくいものもあり、言葉を補って読む必要があるものもある。

図 14 から、英語講読 IA・IB の難易度については 57.2%が「適切であった」と答えているのが分かる。「少し難しかった」(17.8%)と「少し易しかった」(5.6%)を合わせると 80.6%になり、つまり 245 人の学生は、ほぼ適切な難易度の授業が展開されていたと答えている。

図 14 質問(1)昨年度あなたが受講した英語講読 IA・IB の授業の難易度は、あなたにとって適切でしたか。

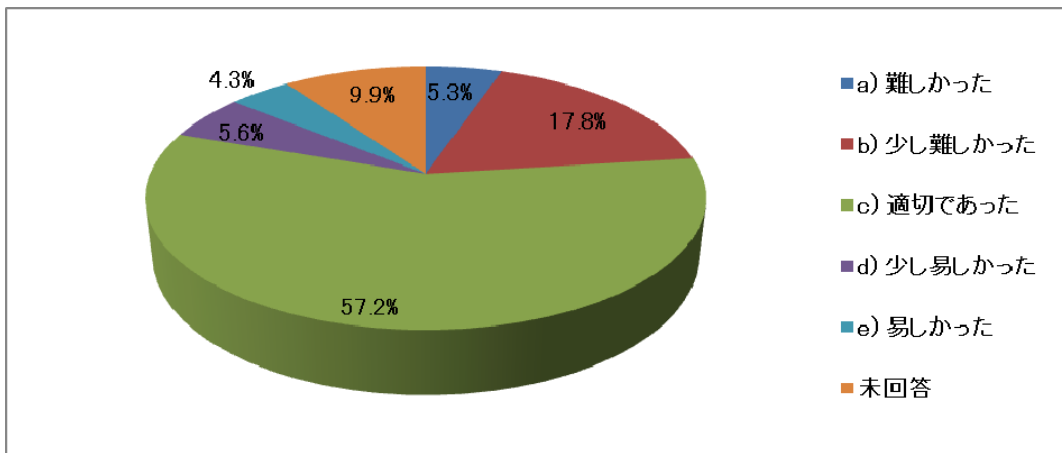


図 15 質問(2)英語講読 IA・IB の授業は良く理解できましたか。

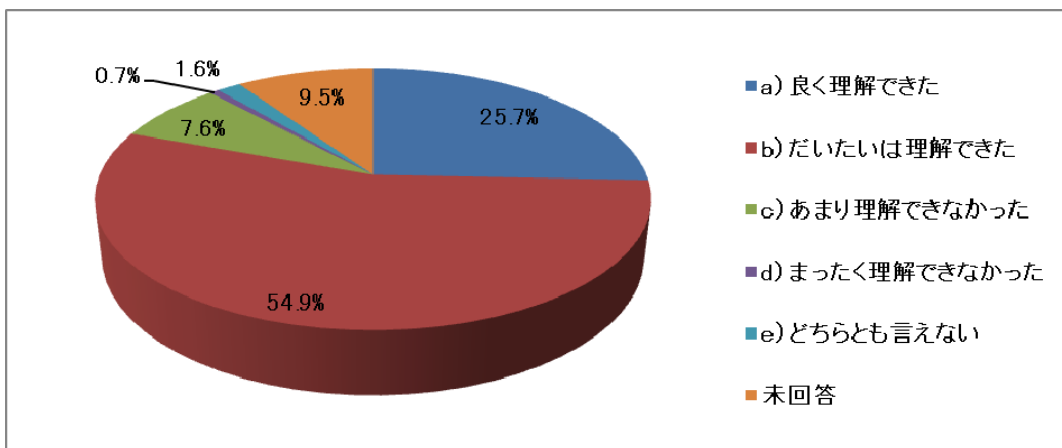


図 15 によると、授業を「良く理解できた」(25.7%)、「だいたい理解できた」(54.9%)を合わせて、同じく 80.6%の学生、245 人が授業を理解できたと答えている。このアンケートでは、設問同士の相関関係は分からないが、一年生に対するアンケート結果も考慮すれば、授業の難易

度が適切、もしくはほぼ適切だと答えた学生は、授業もほぼ理解できたと感じていると推測される。

図 16 に示した質問(3)は習熟度別授業であることが授業への取り組みやすさに影響するかを尋ねている。「取り組みやすかった」(32.6%)、「どちらかと言えば、取り組みやすかった」(38.2%)を合わせて 70.8%の学生が取り組みやすかったと答えている。一年生対象アンケートのこれに相当する質問の場合は、75.6%が取り組みやすかったと答えていたから、それと比較すると若干減少している。しかし、「どちらかと言えば、取り組みやすくなかった」(5.9%)、「取り組みやすくなかった」(4.6%)を合わせると 10.5%であり、否定的な回答の割合は(一年生は合わせて 10.2%)ほとんど変わっていない。

図 16 質問(3)英語講読 IA・IB が習熟度別授業であることによって、あなたは授業に取り組みやすかったと思いますか。

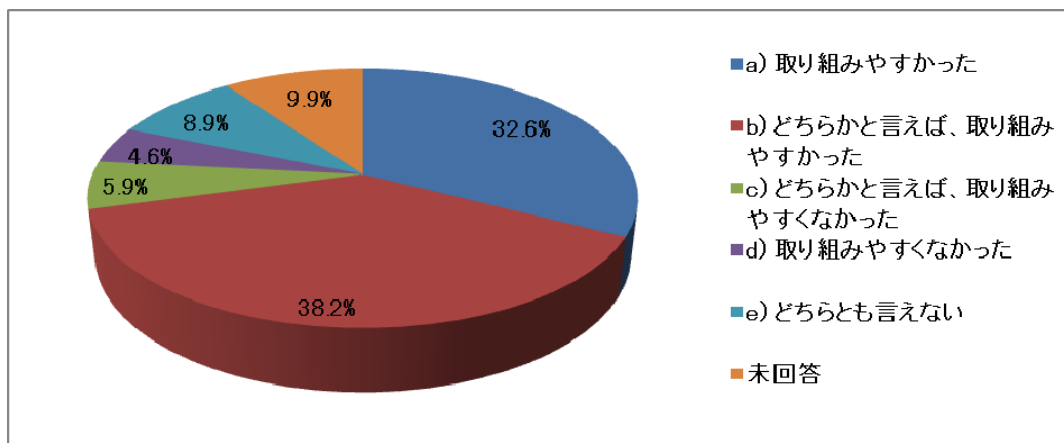
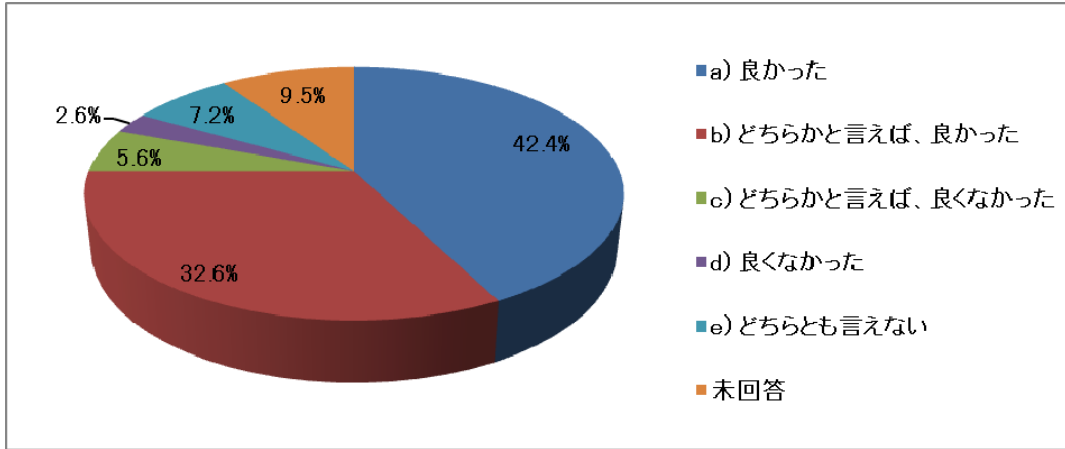


図 17 は、英語講読 IA・IB が習熟度別授業であることを「良かった」と思う学生が 42.4%、「どちらかと言えば、良かった」と思う学生が 32.6%いることを示している。つまり、合わせて 75%が肯定的な回答をしている。これは、合わせて 82.2%だった一年生よりも数ポイント落ちるが、しかし、「良くなかった」ないしは「どちらかと言えば、良くなかった」学生の割合は、一年生は 7.3%、二年生は 8.2%であり、否定的な回答の割合は大差ない。以上のことから、習熟度別授業の英語講読については、一年生も二年生もほぼおなじ反応を示していると言える。

図 17 質問(4) 英語講読 IA・IB が習熟度別授業であることを、良かったと思いますか。



ここからは、習熟度別授業ではない、英語講読Ⅱに関する質問である。図 18 によれば、英語講読Ⅱの難易度が自分にとって「適切であった」(45.4%)という学生は五割を切り、「少し難しかった」(23.0%)や「少し易しかった」(5.6%)を加えても 74%である。一方、「難しかった」(9.9%)もしくは「易しかった」(6.3%)という学生は 16.2%、49 人に上る。習熟度別授業であった英語講読 IA・IB と比較して、授業の難易度が自分の実力から大きくずれていると感じる学生がだいぶ多いことが分かる。比較的英語力のある学生と、英語の苦手な学生が同じクラスに在籍しているために、前者は授業が易し過ぎて退屈な思いをする一方、後者は難しくて耳を傾ける気も起きない、というような授業風景が目につかぶ。

図 18 質問(5) 英語講読Ⅱ授業の難易度は、あなたにとって適切でしたか。

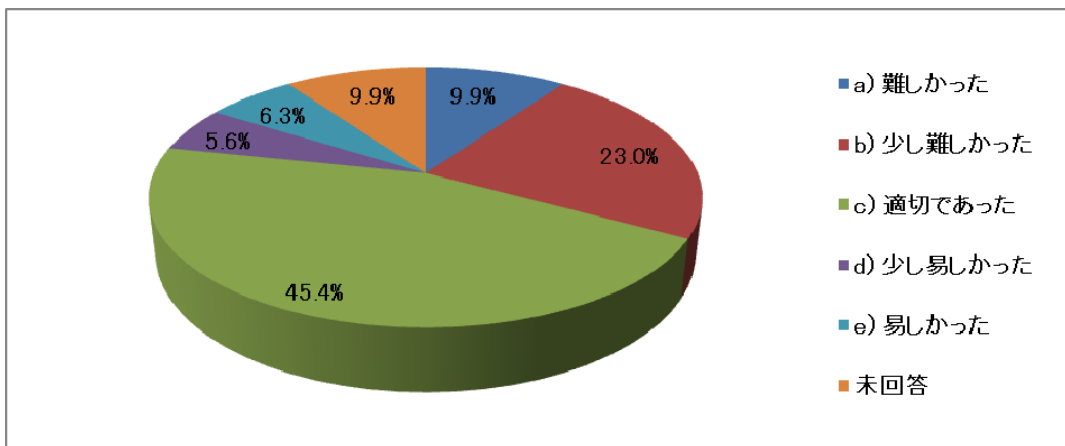
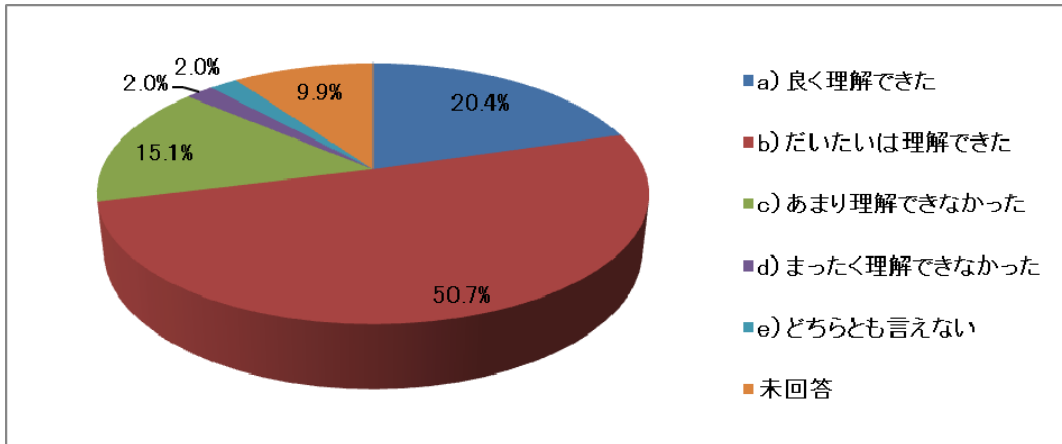


図 19 質問(6) 英語講読Ⅱの授業は良く理解できましたか。



更に、図 19 によれば、七割を超える学生が授業を「良く理解できた」(20.4%)もしくは「だいたい理解できた」(50.7%)と答えているが、「まったく理解できなかった」(2.0%)もしくは「あまり理解できなかった」(15.1%)と答えた学生の割合は 17.1%、52 人に上った。45 人が一クラスの平均人数であるから、それを上回る数の学生が、十分に授業を理解できないまま受講していたことになる。この状況を見過ごしておくわけにはいかないだろう。

図 20 質問(7) 英語講読Ⅱ 授業は習熟度別授業ではありませんが(様々な学力の学生が同じクラスに存在します)、習熟度別にクラス編成されていた方が良かったと思いますか。

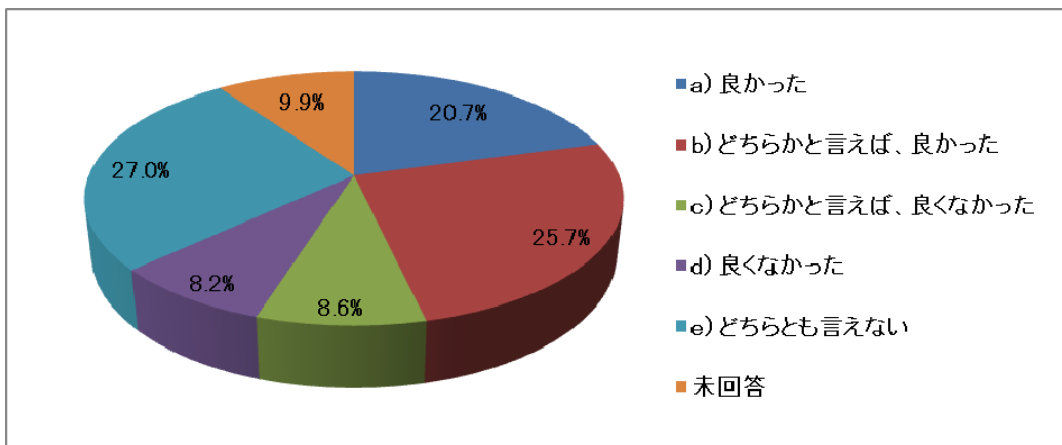


図 20 によれば、習熟度別授業ではない英語講読Ⅱが、習熟度別であった方が良かったという学生は、「良かった」(20.7%)、「どちらかと言えば、良かった」(25.7%)を合わせて 46.4%である。「どちらかと言えば、良くなかった」(8.6%)もしくは「良くなかった」(8.2%)という否定的な答えは合わせて 16.8%だが、「どちらとも言えない」という答えは 27%、82 人とかなり多い。ここまで見てきたように、多くの学生が習熟度別授業の方が適切な難易度の授業であり、理解し易い授

業だと感じている。しかしそうだからと言って習熟度別授業を望むと言う訳でもないようだ。これは一年生対象の質問(7)で示されたものと同様に、興味深い結果だと言える。習熟度別と習熟度別ではない英語講読の両方を経験し、どちらにもメリットがある、もしくはどちらでも結果的には大差ない、と感じたのであろうか。二年生になって、そもそも英語はもうやりたくない、という気持ちもあるのかもしれない。いずれにしろ、この理由を知ろうとすれば、より詳細な調査が必要である。

図 21 質問(8)習熟度別授業について、意見があれば自由に書いて下さい。

<肯定的意見>

英語講読 II でも習熟度別授業を実施して欲しい。(3)
 習熟度別授業では、自分のレベルに合った授業を受けられた。(3)
 習熟度別授業は良い。
 習熟度別授業の方が取り組みやすい。
 習熟度別授業にすると、他系列の学生と交流が持てるので良い。

<否定的・中立的意見>

教師の教え方も、習熟度別クラスに合わせて欲しい。
 習熟度別授業とは言っても、実際は教師によって難易度が変わっていると思う。
 同じ学科は同じ先生が教えるべきだ。
 試験は共通にして評価して欲しい。
 テストの難易度が明らかに異なることが不満だった。
 様々な学力の学生が混在するクラスも良い。
 このままで良い。
 習熟度別授業にも、そうではない授業にも良いところがある。
 同じクラスの学生と一緒にの方が授業に取り組みやすい。
 高校英語より一歩踏み込んだ授業にして欲しい。

<講読 IA・IB と講読 II の変化に言及する意見>

習熟度別授業では難しくて良く理解できなかったが、英語講読 II では少し易しかった。
 講読 II は自分に適切な内容だったが、上級クラスだった学生には物足りない内容だったように見える。
 英語が苦手なので、周りのレベルについていけない。
 英語講読 II では、難しくなって驚いた。
 講義の内容が難しすぎて理解できなかった。テストもできなかった。

図 21 は、自由記述式の質問に対する回答を示している。やはり回答数が少ないが、習熟度

別授業に対する肯定的意見、否定的ないしは中立的な意見については、一年生の場合と同じようなものが寄せられている。ここで特に注目すべきなのは、習熟度別授業と習熟度別ではない授業の差異について触れた回答である。習熟度別の英語講読 IA・IB から習熟度別ではない英語講読 II に変わったら、授業の難易度が上がった、下がったという意見が認められる。もちろん、単に教師や教材、教授法が変化したことからそのような差異を感じる学生が生じている可能性もあるが、習熟度別ではないクラス編成になったことで、授業に在籍する学生の学力が、授業が目標とする学生の学力に一致しないケースが多く生じていると考えられる。これは、質問(5)、(6)が示しているように、習熟度別ではない英語講読 II の方が、授業の難易度を適切だと感じない学生の数も、授業を理解できない学生の数も多くなっていることに重なる。授業の難易度はたいていクラスの多数を占める学生のレベルに合わせて設定されるはずだから、学力混合クラスの場合は中級クラスの学生に合わせた授業が展開されることになる。したがって、一年生で上級クラスあるいは初級クラスだった学生にとって、英語講読 II の授業の難易度が合わないのは当然なのだが、それを放置しておくべきではないだろう。教員の側でも、講読 IA・IB と比較して講読 II の方が授業をやるににくいと感じることが少なくないのだ。もちろん、学力混合クラスにも良さはあるし、所属学科が決定している二年生では学科ごとのまとまりを重視する必要性もあるかもしれない。習熟度別ではない授業の良さを指摘する学生もいる。しかしながら、授業の難易度の適正化と学生の理解度を高めるためには、英語講読 II でも習熟度別授業の導入を検討すべきではないだろうか。

VI まとめ

アンケート結果の分析から見えてきたように、現状では、習熟度別授業は学生から肯定的に受け止められており、授業の難易度の適正化と理解度の向上に貢献していると言える。また、プレースメントテストもほぼ適正に機能している。したがって、習熟度別授業の導入は成功していると言ってよいだろう。今後の検討課題として、英語講読 II でも習熟度別授業を実施すべきではないかということが挙げられる。調査結果から推測すれば、習熟度別の導入によって自分のレベルにより適した授業を受けることが可能になり、理解も深まることだろう。しかしながら、二年生になると学科別に分かれるので、時間割編成上の障害などが大きいかもしれない。

今回の調査からは習熟度別授業の運用において懸念されうるデメリットはほとんど検出されなかったが、問題がまったくないというわけではない。高橋によれば、習熟度別クラス編成の「功

罪については、ほぼ研究し尽くされているにも拘わらず、アメリカでは依然として教育論争のテーマとなっている。日本においても(中略)隆盛と退潮を繰り返している」という(147)。これは、メリットの多きい習熟度別授業にはデメリットも少なくないことを物語っているだろう。日本の中等教育までの習熟度別授業に関する研究は数多く、特に小学校・中学校に関する研究が顕著である。その中には佐藤のように、習熟度別授業を痛烈に批判する研究も存在する。一方、高等教育機関である大学における習熟度別授業に関する研究はおおむねこの方式に好意的であり、目立った批判は見当たらない¹⁰。学力格差の大きい現在の大学生には、習熟度別授業のメリットが大きいためだと考えられるが、今後も学生の傾向に注意を払い、点検していく必要があるだろう。

引用・参考文献

大庭経示他「数学の習熟度別授業による学習効果について」『高専教育』第 35 号、2012 年。

221-25 頁。

佐藤学『習熟度別指導の何が問題か』、岩波書店、2004 年。

杉森幹彦「英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定および測定に関する実態調査の報告」『政策科学』第 10 巻 3 号、3-26 頁。

高橋寿夫「外国語科目「英語」の改善に向けて—習熟度別クラス編成について—」『關西大學文學論集』、第 49 巻 4 号、2000 年。143-62 頁。

広島大学高等教育研究開発センター『大学における教育内容・方法等の大学教育改革に関する調査分析』、2010 年。

¹⁰ 管見ながら、大庭他が報告している、高専の数学で長年運用された習熟度別授業の学習効果が疑われ、調査の結果廃止に至った事例を一件確認できたのみである。